

3

外国語学習に成功する人、しない人

どんな学習者が第二言語習得に成功するか

プログラムでも書いたように、幼児の母語習得はほとんどの場合成功するのにな、大人の第二言語習得はほとんどの場合失敗に終わります。ただ、失敗に終わるとしても、その程度は千差万別で、ほとんど習得せずに終わってしまう人から、ネイティブスピーカーとほとんど区別がつかないくらいレベルに到達する人までいます。後者の場合、一般的な見方からすれば、成功したといえるでしょう。それでも第二言語習得の研究者のあいだでは、そのような学習者も、厳密に検証すればネイティブスピーカーと同じレベルまで行っていない場合がほとんどであるという考えが支配的で、その意味では失敗といえます。ですが、本章では、「成功した人」というのをそれほど厳密に考えるわけではなく、「ある程度成功した人」ととらえて話を進めます。

どんな学習者が第二言語習得に成功するかという問題は非常に面白いです。効

率よく外国語を習得する人もいれば、もうどうしようもない、というぐらゐ進歩が遅い人もたくさんいます。ここでは、年齢、適性、性格など、外国語学習に成功する人の資質を考えてみます。

年齢要因(臨界期仮説)

ここで一つ仮定の問題を考えてみましょう。ある日本人の大学教授が、日本の職を辞して、アメリカの有名大学に移るようになりました。彼は三〇代後半、専門はコンピュータサイエンスで、英語はあまり得意ではありませんが、英語で論文を読んだり書いたりすることはそれなりにできます。彼には五歳と一歳の息子がいます。どちらもまだ英語はまったく知りません。さて、この三人の英語力は、今後どう伸びていくでしょうか。一年後、一番英語ができるのは二人のうち、誰でしょう？ 五年後、一〇年後では？

習得の成否の個人差を説明する一つの要因として第二言語習得研究で受け入れられているのは、年齢です。これについては「臨界期仮説」という名前がついていて、外国語学習には、臨界期、すなわち、その時期を過ぎると学習が不可能になる期間がある、という考え方です。この臨界期は思春期(一二三歳までと考えられており、その時期を

過ぎるとネイティブのような言語能力を身につけるのは不可能になる、という仮説です。日本でも、小学校のうちに英語教育を導入しよう、という動きがありますが、その背景にあるのは、このような考え方です。

実際に、この年齢要因というのはかなり強力な制約で、大人がネイティブのようになるのは、ほぼ不可能のようです。それに対して、小さいころに習得が始まると、第二言語をかなり自然に話せるようになります。海外勤務のサラリーマン(とその妻)の英語がなかなか伸びないのに、子どもはすぐに親を追いこしてしまふ、というのはよくある話です。

前の章で述べた朝鮮人虐殺事件に関連して、芥川賞受賞作家の李良枝さんが次のように書いています。

「また関東大震災のような大きな地震が起ったら、朝鮮人は虐殺されるかしら。一円五十銭、十円五十銭と言われて竹槍で突つかれるかしら。でも今度はそんなこと起こらないと思うの、あの頃とは世の中の事情が違っているもの。それにほとんどが日本人と全く同じように発言できるもの。」

(李良枝『かずきめ』傍線筆者)

人種の影響？

この年齢の問題に関して、二〇〇〇年に京都で行われた言語科学会の大会で、ニューヨーク州立大学のジセラ・ジア(Gisela Jia)の非常に面白い研究発表がありました。臨界期については、その存在を主張した有名な論文がジョンソンとニコルソンによって一九八九年に発表されています。ジアの使った調査方法はこの研究に近いもので、アメリカに移住した人のアメリカ到着時の年齢と英語能力のデータの関係を調べ、それをヨーロッパ系グループ(主にロシア語を母語とする学習者)とアジア系グループ(北京語、広東語、韓国語を母語とする学習者)に分けて比較しました。

識が発達していないので、他の子どもと自然に交わることができる。それに対して、大人はなかなか新しい環境に溶け込めず、また自我が発達しているため、外国語環境になじめない、というものです。つまり、子どもと大人の外国語学習に対する心理的態度が違ったために、学習環境に差が出る、ということです。

このほかにも説がありますが、今のところ、決定的な答えは出ていません。ここであげたどれもが原因となっている可能性もあります。

について議論があります。

次に、なぜ年齢の影響がそれほど強いのかという問題がありますが、その理由についても意見の一致がなく、さまざまな提案がなされています。

まず、脳神経生物学的な説明があります。脳の構造が特定の年齢で変化し、その後は第一言語を学習する能力が衰えてしまふ、という考え方です。脳のもつ柔軟性がある年齢になるとなくなってしまう、といつてもいいかもしれません。母語に関しては、子どものときに事故などで脳を損傷し言語障害になつたとしても、別の部位がその機能を担つてくれて言語が回復するが、大人の場合はそう簡単にはいかない、という現象が報告されており、これが言語習得に関する脳の柔軟性、可塑性が大人になると失われることの証拠としてよくあげられます。

次に、認知的な説明によれば、「大人はすでに抽象的分析能力が身についているため、言語習得が自然に行えないが、子どもはあまり分析せず、第一言語を学ぶのと同じように、自然な習得ができる」ということになります。第4章で触れますが、言語習得はインプットを理解することでかなり無意識的に習得されるので、あまり分析的に考えるとまずい、という考え方です。

心理的態度の違いによる説明もあります。子どもは第二言語を習得するときに、自意識

個人差の要因

年齢のほかにも、適性、性格など、個人差を生む要因があります。これらは、学習者個人の特徴で、比較的安定したものです。第1章のトピックだった動機づけも個人差の要因と考えられますが、時間とともに変化する可能性が強いので、やや質が違います。まず、適性からみていきましょう。

でもそうです。いわゆる白人が日本語を学習するとき、日系アメリカ人が学習するとき、中国人が学習するとき、いったいどう違うのか。やはり、自分がネイティブスピーカーと一体感をもてるか、それがもてない場合にはどうか、というような問題を検討してみる必要があるでしょう。

話を元に戻しますと、もし、脳の生得的に決められた制約が臨界期の原因になっているのであれば、それは全人類に働くはずであって、アジア系だけに年齢の影響があつてヨーロッパ系にはない、という現象は説明しにくくなります。そうすると、ジヤの研究の結果は、言語習得と年齢の関係に関して、いわゆる環境的な要因が重要で、脳による生得的な制約のような要素は関係がない可能性もあることを示していることとなります。今後さらなる研究が望まれるところです。

には統計的に有意な年齢の影響がありました。面白いことに、年齢要因の強い影響を見出したジョンソンとニエホルトの被験者はみな、中国系と韓国系の学習者でした。中国系、韓国系の方がアメリカに行く、いろいろな意味でアメリカ社会にフィットしないということがあります。そうすると、アメリカ人みたいになりたいとか、アメリカ人と遊ぶより、アジア系どうして固まりがちです。そしてその傾向はジヤの研究によると移住した年齢が高くなるほど強くなります。だから、英語がそんなに伸びない、というわけですね。ところが、ロシア人だったり、白人系のアメリカ人かどうか見ただけではわからないくらいなので、お互い親近感を感じて、つきあいやい。見た目というのは大事なわけですね。筆者はアメリカの大学に留学していたとき、大学院生用の寮に住んでいたのですが、食堂で晩御飯を食べるときに、多くのアジア人は、いわゆるソフイティンやのアジア人—韓国系とか中国人—がそれぞれグループをつくってしゃべりに座っていました。それだけでなく、アジア系アメリカ人が、やっぱり自分たちだけでよく固まっていたのです。

残念なことには、第二言語の達成度と人種の間にはこれまでのところほとんど研究されていません。しかしこれはおそらくかなり重要な要因だと思います。日本語学習について

適性テスト

外国語学習の適性を測るテストにはいくつかありますが、もっともよく知られているのはMLAT (Modern Language Aptitude Test) 現代言語適性テストです。これは、もともとアメリカ国務省(日本の外務省にあたる)の外交官養成機関である Foreign Service Institute で、外国語学習者の候補を選別するのに作られたものです。第二言語習得における適性に関する研究は、MLATをはじめとする適性テストと、学習の結果である外国語テストの得点との関連を調べることで進みました。MLATは四つの異なったタイプの能力を測るように作成されています。それは(1)音に対する敏感さ、(2)文法に関する敏感さ、(3)意味と形の関連パターンを見つけた能力、(4)丸暗記する能力、の四つです。適性については膨大な研究があり、MLATなどの適性テストによって測られた適性が、かなりの部分まで教室での外国語学習の成否を予測することがわかっています。

外国語学習適性については、もう一つ面白い現象があります。それは、第一言語と第二言語の両方に共通する、いわゆる「言語学習適性」がありそうだ、ということです。これは、ロンドン大学のゴードン・ウエルズ(Gordon Wells)、現カリフォルニア大学

「あの人は語学の才能がある」などという話をよく聞きます。このときの「語学」というのは、もちろん言語学ではなく、外国語を学習する能力のことです。これは、外国語学習に向いている人、向いていない人がいるということが一般に信じられている、ということを通じて、では、実際にそのような「適性」というものがあるのでしょうか。

外国語学習に向いていない人は、実際にいるようです。最近、アメリカでは「外国語学習障害」というものが認められつつあり、他の科目の学習はふつうにできるが外国語だけはだめ、という学生が時々いることが知られています。筆者の所属するコネル大学でも、外国語学習障害と認定されれば、必修の外国語を免除されます。これが認められないと、その学生は大学を卒業できないので、死活問題です。

ただ、この外国語学習障害というのが、いったいどうしておこるのかはまだよくわかっていません。たとえば、この学習障害が、外国語学習適性が極端に低いだけなのか、それとも本質的に異なるのか、今後の研究が待たれます。またそのような学習者を理解することが、外国語学習適性の本質の解明に役立つかもしれません。

外国語学習の適性とは何か

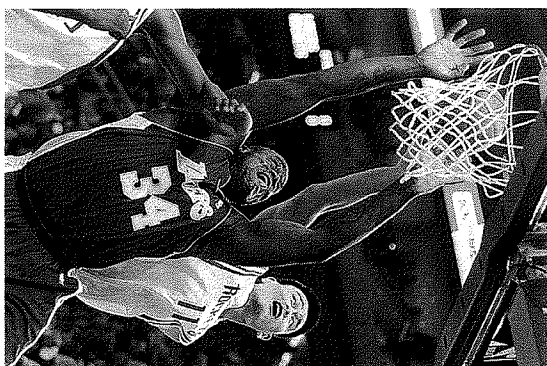


図5 姚明(右)とシャキール・オニール(左)(REUTERS・SUN photo by Jeff Mitchell)

これはなかなか面白いコメントです。つまり、英語ができる、というのを知性がある人間(intelligent human being)だ。」

いろいろ英語で話している。彼はけっこう英語ができるんだ。だから、彼は知性の「姚明は、インタビュアーでは通訳を使って英語は話さないが、僕らは、コートでは、

外国語ができる」と知性がある？

先日、アメリカプロバスケットボール(NBA)のシャキール・オニールが、中国出身の姚明について、次のようなコメントをしていました。

習得能力といったものがある可能性を示唆しています。

この問題についてはさらなる研究が必要ですが、第一・第二言語習得に共通する言語的ならんといわれています。

外国語学習は、そのさまざまな要因(動機づけ、教授法など)に強い影響を受けるか、時の文法発達レベルと外国語の成績との相関はそれほど強くありませんでした。これは、のレベルと、外国語学習適性とのあいだには相関がみられました。面白いことに、三歳に、彼らの外国語学習適性と外国語の成績を調べたのです。すると、三歳時の文法発達適性の発達個人差を調べたのうち、その子どもが三歳になって、外国語学習を始めるころを調査するために、二九人の子どもの長期にわたって調査しました。まず、第一言語がワエルズは、イギリス人幼児の言語発達における個人差を決定する要因は何なのかによって明らかにされたことです。

サンタクルズ校)やピーター・スキーン(Peter Skehan、現香港中文大学)らの研究に

かどうかわかりませんが、ロサンゼルス・レイカーズ時代のチームメイトのコービー・ブライアントは子どもころイタリヤで過ごしたので、イタリア語ができるそうです。これは、先に述べた「臨界期」を考えれば、当たり前ですが。それを考えると、サッカーの中田英寿

一般的によく使われる「あの人は語学の才能がある」という言い方は、外国語学習に特有の適性を前提にしています。それに対して、「外国語ができる」と知性がある」といふ言い方は、一般的な知性と外国語学習適性を同一視しています。この二つはある意味では矛盾しています。

実は「知能・知性(intelligence)」と「外国語学習適性」の関係は、専門家のおいだでもさまざまな議論があるのです。まず、これらを信頼性・妥当性のある方法で測ることが難しいという問題がありますが、それはさておき、これらを測ることができたと仮定して、語を進めます。

この分野の研究では、知能については、いわゆるIQテストで測定した得点を、そして適性については、MLATなどの適性テストの得点を使います。その結果、この二つの能力にはかなり重なる部分はあるが、同じというわけではなく、「外国語学習特有の適性」という独立した能力がある、という結果が出ています。これは私たちの直感とも一致するもので、だいたいにおいて成績のいい人は英語の成績もいいが、ほかの成績はばつとしないのに、英語がやけにできる人もいる、という現実と一致するのです。

さらに、いくつかの研究で面白い結果が出ています。第二言語習得研究でよく使われる概念に「日常言語能力」と「認知学習言語能力」というものがあり、簡単にいえば、

知性と外国語学習適性の関係

が、大人になってからインタビュに答えられるレベルまでイタリア語を習得したのはたいしたものです。最近では日本人スポーツ選手が外国で活躍していますが、彼らが外国語をどの程度習得できているのか、第二言語習得研究者でなくとも興味のあるところでは、

さて、その国のことはできないと知性まで疑われる、というのは、残念ながら実際にあることです。たしかに、日本人でも、外国人とあまり接したことのない人は、外国人が片言の日本語で話しているのを聞くと、頭が悪いのではないかと、という印象をもつこともあるようです。知り合いの外国人が、スーパーなどで頑張って日本語を話すとかにされるのに、英語に切り替えるときに待遇がよくなる、などと言っています。これが、これもそのせいかもしれません。



図6 フランzenデリ監督から出場前の指しを受ける中田英寿(ANSA=共同)

外向的な人が成功するか

外交的な人のほうが外国語学習に成功するということも、直感的にはありそうなことです。外向的な人は内向的な人に比べて会話の機会が増えると思われるからです。ただし、前に述べた日常言語能力と認知学習言語能力の区別を考えると、自然にコミュニケーション

の数で優れている、という研究もあり、(3)両者の差がない、という研究もあります。男性のほうが明らかに優れている、という研究はないので、「女性のほうが男性よりも外国語学習に向いている」という一般化はある程度あっているかもしれません。理由はまだよくわかっていませんが、一ついえることは、女性のほうが男性よりも外国語学習に対して肯定的な態度で臨む場合が多い、ということです。これがおそらくより高い学習達成度につながっているのではないのでしょうか。

では、なぜ女性のほうが外国語学習に対して肯定的か、という問題についてもさまざまな意見があります。女性のほうが人間関係についてより協力的なのに対して、男性は競争的であって、誰が上であり、下であるかに敏感であり、そのため男性は、高度に社会的な営みである外国語学習に向いていないのではないか、という見解もありますが、本当の理由はまだわかっていません。

女性のほうが外国語学習に向いているか

これはある意味では納得のいく結果です。もともとIQテストは学校での学業成績を予測するためにつくられたもので、より学業的な能力と関連するのだと思われれます。さらに、意識的学習はIQとの相関があるが、無意識的学習は必ずしもそうでない、という研究もあります。これらについては、すべての研究で同じ結果が出ているわけではないので一概にいえませんが、もしかすると、学校での英語の成績が悪かった人も、会話などではうまくなる可能性があるということで、学校の英語はだめだったが、会話には興味がある、という人には朗報かもしれません。

よく、「女性のほうが語学の才能がある」といわれます。実際はどうなのでしょう。もちろん男性で外国語がうまくなる人はいくらでもいますから、男性だからだめということはありませんが、外国語学習における男女差を比較した研究の結果は、(1)女性のほうが成績がよいことを示す研究がいくつかあるが、(2)男性のほうが聞き取れる単語

自己抑制をあまりしないほうがよい？

外国語を学び、それを話す、という行為は、ある意味では新しい人格を身にまとうことである、と言ってもいいかもしれません。母語で話しているときはなんでも自由に言いたいことを言えるのに、第二言語ではそうはいかず、ときには頭が悪くように見えるかもしれない。つまり、いつもと違う自分になる必要があるのです。そのため、外国語を話すときは、ある程度自分を解放して、新しい自己を人に見せることになり、ちょっと慣れるまでは、かなり気恥ずかしいものです。そこで、自我が傷つかないようにつねに自分を抑制している人より、自由に新たなマヤラクターを演じることのできる人のほうが、外国語学習に成功する、という仮説が立てられました。

この仮説を検証するために、ミンガン大学のアレクサンダー・キオラ(Alexander Gloria 現ハイファ大学)は、少量のお酒を飲ませることににより、自己抑制の度合いを下げるという実験をしました。すると、お酒を飲んだグループのほうが、外国語(タイ語)の発音がよかったです。これも、直感的に納得のいくものです。筆者も大学生時代、英会話の練習をしていたころ、お酒が入ったほうが滑らかに話せた記憶があります。緊張が解けるからかもしれません。非常に興味深い示唆をもつ研究ですが、残念ながら、

1つする能力(日常言語能力)は外向性と相関するが、筆記テストで測るような外国語能力(認知学習言語能力)は内向的な人のほうが高いだろう、という仮説も立てられます。内向性は外国語とは関係ない学業成績全般と相関がある、ともいわれたので、この仮説には一定の信憑性がありました。

研究の結果をみると、外向性が日常言語能力と相関する、という傾向は多くの研究によって支持されましたが、内向性が認知学習言語能力と相関する、という仮説のほうは実証テストによって支持されませんでした。よって、外向性のメリットはあるが、内向性により強い相関を示しています。つまり、外向的という性格そのものよりも、「外国語で会話をする」ことを含む外向的行動を実際に行うことが、大事なことだと思います。

ただし、日本人の英語学習者に対して行われた研究では、外向性と日常言語能力の相関さえなかったそうです。研究が行われた一九八〇年ころは日本ではあまり会話練習が行われていなかったと思われることを考慮すればこれも納得のいくことで、そのために、外向性のメリットがあまりなかったのでしょうか。実際、ある研究では、質問紙によって測られた外向性よりも、研究者が教室で観察した「外向的行動」のほうが、日常言語能力とより強い相関を示しています。つまり、外向的という性格そのものよりも、「外国語で会話をする」ことを含む外向的行動を実際に行うことが、大事なことだと思います。

4

4 外国語が身につくとはどういうことか

その後検証されていません。発音だけではなく、流暢さとか、文法的正確さとか、その他の面ではどんな変化があるのか、大変興味深いところです。夜間の英会話スクールなどは、ビールやワインでも少し飲みながら授業をするのもよいかもしれません。ただし、タイ語の発音は、アルコールの量が多すぎると悪くなるといふ結果も出ています。やはり飲み過ぎるとそれづがまわらなくなるので、適量が大事なわけです。これらの結果は、実験前にアイスクリームを食べていたグループのみに見られ、空腹でアルコールを飲んだグループにははつきりしたアルコールの効果は出なかったようです。いずれにせよ、アルコールの効用については、さらなる検証が必要でしょう。

本章では、外国語ができるようになるとはどういうことか、そのプロセスを考えてみましょう。外国語学習のメカニズムについて、今までにわかっていることを述べます。もちろん、まだわかっていないことや、研究者のあいだで論争のある問題も多いのですが、細かい点はさておき、全体像をつかんでいただければと思います。

言語習得は聞くだけでおこる？—インプット仮説

第一、第二言語習得研究において、インプット(聞くこと・読むこと)だけで言語習得が可能か、それともアウトプット(話すこと・書くこと)が必要か、という論争があります。これは主に幼児の母語習得に関する論争なのですが、外国語の学習にも密接に関係してきます。「言語習得は、母語も外国語も言語内容を理解することによってのみおこる」という